

小泉八雲の仏教観

前 田 専 學

本稿は、平成八年七月四日、駒澤大学仏教学会公開講演会において用いた講演原稿である。

目 次

- 一 小泉八雲研究の現状
- 二 小泉八雲の生涯と仏教関係の作品
- 三 小泉八雲と仏教
- 四 来日当時の日本のインド学・仏教学
- 五 小泉八雲の仏教観
 - (1) 来日前の仏教観—What Buddhism Is—
 - (2) 来日後の仏教観—Nirvana—
- 六 むすび

只今ご紹介にあずかりました前田でございます。本日はこの伝統のある本学の仏教学会の公開講演会にお招きいただきました。黒丸仏教学部長に、厚く御礼申し上げますとともに、

ご関係の諸先生方にも謝意を表したいと思います。

じつは、このように仏教学に精通しておられる先生方を前にして、私の如き仏教を専門としていないものが、何をお話したらよいのかと、困惑いたしました。いろいろ考えました結果、最近、私が関心をもって、若干研究に手を染めてきました小泉八雲についてお話ししよう、とくに八雲の仏教観についてお話ししてみたらどうか、と思ひまして、黒丸仏教学部長に「小泉八雲の仏教観」という題目をご提案いたしましたところ、幸いお認めいただきました。

一 小泉八雲研究の現状

最近の小泉八雲研究の盛行は、まことに目覚ましいものがあります。これは、八雲の再評価の動きであり、かれの没後七〇年にあたる昭和四九年前後から活発となりました。その再評価の分野は、八雲の再話文学者としての研究、比較文学

的研究、日本研究家としての八雲研究、八雲の民俗学的側面の研究、教師・文芸評論家としての八雲研究、八雲の伝記・伝記的研究、八雲の周囲の人々の研究、八雲の文学の後世に与えた影響と評価、八雲の著作の邦訳、といった広い領域にわたっています。

しかしながら、未だにめぼしい研究のないのが八雲の思想面の研究であります。とくに八雲の人生観の一つの核をなしているといわれているインド学・仏教学の視点からの照明は、まだほとんど当てられていないままであるといつてよいと思います。

しかし昨年になって、マラルメ研究の専門家である竹内信夫氏が、ほぼ同時に、二点の好論文「八雲「ニルヴァーナ」について」（『国文学・解釈と鑑賞』五六巻二一―号、一九九二、一〇一―九頁）、「異文化への眼差し―ウィリアム・ジョーンズ、ウジェーヌ・ビュルヌフ、ラフカディオ・ハーンをつなぐもの―」（『比較文学研究』六〇、一九九二、二四―五四頁）を発表しました。竹内氏が、これらの論文によって、八雲が具現していた異文化理解の精神が、仏教を介して、ウジェーヌ・ビュルヌフにつながっていることを指摘し、西洋における二〇〇年の伝統をもつアジア研究の再評価の必要性を指摘したことは、まことに適切・妥当であると思います。

河島弘美氏は、「日本でのハーン研究は、〈文豪〉へへるん

先生〉の功績を顕彰することを目的とする弟子や信奉者中心に出発したためばかりとは思えないが、ともすると客観的で公平な視点が欠落しがちである」という反省を提出し、「説得力のある実証のための努力を怠るならば、研究ではなく崇拜であるという批判は免れず、再評価によって発見されたハーンの卓越性、独自性も国外では評価されないままに終わることになる」と警告を發しています（小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）研究の軌跡、『国文学・解釈と鑑賞』五六巻二一―号、一九九二、一四九頁）。私がまったくの素人ながら、八雲を調べ始めたのは、インド学・仏教学の研究者は、八雲の説得力のある実証的な研究を促進するのに、何らかの貢献をする余地が残されているのではないかと思っただけであります。

二 小泉八雲の生涯と仏教関係の作品

ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) は、一八五〇年に、ギリシャのレフカス島で、イギリス進駐軍の軍医チャールズ・ブッシュ・ハーンと島の女ローザとの間に生まれました。幼児のとき、父の故郷であるアイルランドのダブリンに移りましたが、母と生別し、裕福な大伯母に育てられました。フランスのイブトールとイギリスのアッシュリーのカトリック系の学校で教育を受けました。しかし家庭の崩壊、カトリック神父に対する反発、不慮の事故による左眼の失明、大伯母

の破産など、つぎつぎと不幸に出会いました。一九歳のとき、イギリスを捨ててアメリカに文無しで渡り、シンシナティで苦勞しながら新聞記者として有名になりました。その後ニューオーリンズに行き、フランス文学の翻訳・紹介、フランス領西インド諸島の探訪記事を書物の形で刊行しました。一八九〇年に来日、島根県立松江中学校の英語教師となりました。松江の人、小泉セツと結婚、後日本に帰化して、日本名を小泉八雲としました。一八九一年熊本第五高等中学校に移りました。神戸で一時英字新聞記者を務めた後、一八九六年から六年半にわたって東京大学で英米文学を講義し、早稲田大学に移った一九〇四(明治三七)年九月二六日、八雲は、西大久保の小泉邸で、狭心症のため、五四歳三ヵ月で亡くなりました。八雲の告別式は、仏式で、市谷富久町の瘤寺で行われ、法名は彼の日本名もとりにいれた「正覚院浄華八雲居士」とされ、葬られたのは雑司谷の墓地でした。

八雲が来日して書いた作品の数は、巻数にすると、一一あるいは一二巻にのぼります。八雲は、しばしば友人に宛てた手紙の中で、「自分は仏教徒ではない」と述べてはいますが、かれの作品の中で、説話、民謡、伝説、怪談などの形で、日本の仏教に関する作品はかなりの数に達します。しかし八雲の仏教研究の意味で注目すべき作品は、①「横浜にて」(In Yokohama 『東の国より』、一八九五、熊本時代)、②「前世

の觀念」(The Idea of Pre-existence 『心』、一八九六、神戸時代)、③「涅槃」(Nirvana 『仏国土拾遺』、一八九七、神戸時代)、④「仏教の伝来」(The Introduction of Buddhism 『日本—一つの試論』、一九〇四、東京時代)、⑤「高度の仏教」(The Higher Buddhism 『日本—一つの試論』、一九〇四、東京時代)、の五点の著作であります。

本日は、これらの作品の中の「涅槃」と、来日前に書いた「仏教とは何か」(What Buddhism Is)と横浜に上陸して日本の第一印象を綴った「東洋の土を踏んだ日」という三つの作品を中心に小泉八雲の仏教観を探ってみることにしたいと思います。

三 小泉八雲と仏教

『知られざる日本の面影』(Glimpses of Unfamiliar Japan)は、八雲の日本関係の著作の中の最初の作品集で、みずみずしい感動にあふれた八雲の最初の日本印象記として大變好評を博し、一躍かれの名声を高めた作品であります。その中に収められている「東洋の土を踏んだ日」(My First Day in the Orient)は、一八九〇(明治二三)年四月四日、到着早々の横浜の周辺が舞台となっています。八雲によれば、そのときの第一印象の走り書きをもとに、到着して何週間か後に、その第一印象の数々を再生したもののようであります。

かれは、朝から、自分のことを「チャ」と呼ぶ俵屋を雇って出掛けましたが、ことばが通じず、

私は、いったん洋風の旅館へもどらねばならなくなつた―昼食のためではない。食事の時間さえ惜しいのだから。お寺に行きたいという希望をチャに分からせることができなかったからである。やっとチャにその意が通じた。旅館の主が、神秘に充ちた言葉を言ってくれたから

「テラヘユケ」

このようにして、日本に来て、食事の時間さえも惜しんで、真先にかねて行きたいと思っていた寺に人力車で行ったのです。すると寺に住みこんでいた晃と名乗る若者が、閉め切っていた入口の障子戸を静かに開け、かれに歓迎の意をこめて鄭重に礼をし、本堂に招じ入れました。晃は、驚くべきことに、「話すアクセントは奇妙であるが、語彙はよく選び抜かれて品がよい」「見事な英語」で、八雲に話し掛けたのでした。それに続く二人の会話は、大変に興味深く、また来日前の八雲の仏教と仏教理解を知るのに、きわめて有益な手掛かりを与えるように思われます。

やがて彼は尋ねる―

「あなたはキリスト教徒ですか」

それで私は正直に答える―

「いいえ」

「あなたは仏教徒ですか」

「厳密には、そうとは言えません」

「仏様を信じていないのに、どうしてお供え物をなさるのですか」

「私は、仏陀の教えの美しさを崇め、それを奉じている人たちの信仰を尊いものに思います」

「イギリスやアメリカにも、仏教徒はおりますか」

「すくなくとも仏教の哲理に関心を抱いているものは、たくさんいます」

すると彼は、床の間から一冊の小さな本を取って、私にごらんなさいという。それはオルコットの『仏教教義問答』の英語版であった。

それに続く場面での、二人の間の会話は、さらに興味深いものがあります。かれらが話をしている間にやってくる参詣人のなかに、柏手を打つものがあり、それに関連して二人の会話は続きます。

「なぜ、お祈りをする前に、三度手を打つのです」
彼は答える。

「天地人三才のために、三度打つのです」

「それはそうと、神様や仏様を呼ぶのに、日本人は召使を呼ぶ時のように、手を叩いて呼ぶのですか」

「いいえ、決してそうではありません。手を叩くのは、長い夜の夢から醒めたというしるしです」

「どんな夜、どんな夢ですか」

しばらくためらうような気配があつて、彼は答えた。

「仏陀は申されました。一切衆生は、この苦しみ多い無常の世で、夢ばかりみていると」

「では、手を打つのは、祈る時には魂がそのような夢から醒めるという意味ですか」

「その通りです」

「私のいう魂の意味はお分かりでしょうね」

「もちろんです。仏教徒は魂が過去にも未来にも——永久に変わらず存在すると信じています」

「涅槃に入ってもですか」

「そうです」

この寺の後、チャに頼んでさらに三寺院——その中の一つは神社であつたらしい——を訪問して、八雲は宿に帰った。

この「東洋の土を踏んだ日」の後に、晃が八雲に語った話をまとめた「弘法大師の作品」、別の日に晃の案内で神社仏閣を訪れた経験を綴った「地蔵」、さらには鎌倉・江ノ島などへの紀行文「江ノ島への巡礼」などが続きます。これらの作品は、八雲が、日本に到着する以前から、いかに仏教に関心をもっていたか、また三度の食事以上に寺を訪ねることに熱中していたかをよく物語っています。

しかも、前に引用した八雲と晃の会話の中で、晃から靈魂が存在すると聞いたとき、心外そうな反応をし、さらに「私のいう魂の意味はお分かりでしょうね」と念を押し、再度「涅槃に入ってもですか」とたたみかけて質問したという事実は、注目に値します。何故八雲は靈魂と涅槃にこだわりをみせたのであろうか？ 八雲はその理由について何も書いていませんが、これは、筆者には、来日前の八雲がもっていた仏教理解と多分に関係があるように思われます。

八雲が、アメリカ時代（一八六九〜一八八九）から、インド思想、とくに仏教に深い関心をもっていたことはよく知られている事実であります。アメリカ時代は、シンシナティ時代（一八六九〜一八七七）とニューオーリンズ時代（一八七七〜一八八七）とに分けられます。大西忠男（『小泉八雲と仏教』『へるん』九、一九八一、三頁）によれば、前者は、「仏教の研究に着手した時代」であり、後者は「かれの仏教研究は本格化し、

その構想ないし計画がほど出来上がった時期」であり、来日以後から死に到るまでの時代は、その「計画の実現ないし仕上げの時期」であったとされています。また平井呈一(「八雲と仏教思想」『小泉八雲入門』古川書房、一九七六、三一頁)によると、八雲が仏教や東洋関係の書物をむさぼり読んだのは、かれのニューオーリンズ時代であったと言われています。すなわち八雲が二七歳から三七歳までの一〇年間であります。

八雲がこの一〇数年間に得た仏教に関する知識・理解はどのようなものであったのでしょうか？ これを知る手掛かりとなるのは、一つはへるん文庫であり、今一つはアメリカ時代に書いた八雲の著作であります。

八雲は、一六歳まではイギリスの大学進学校で行われていた古典教育を受けましたが、それ以後は、体系的な教育を受けておらず、「自分の知識が隙間だらけであることに気づきだすと、自分が無教育であることにたまらなくなった」(E・ステイヴンソン「遠田勝訳」『評伝ラファディオ・ハーン』恒文社、一九八四、一六八頁)といわれています。そんなことが理由となったのでしょうか、かれはシンシナティからニューオーリンズにやって来て、精神的にも経済的にも余裕が出来る、猛烈な読書をするかたわら、本あしりを始め、自分のコレクションのすばらしさを誇るほど、大量の書籍を買い込んだといわれています。

八雲が生前に、日本で持っていた蔵書は、へるん文庫として、現在、富山大学付属図書館に保存されています。このへるん文庫は、八雲がニューオーリンズ時代に買い求め所蔵していたと思われる書物の中の若干を含んでいるので、来日前の八雲の仏教理解を知るのに役立ちます。

この蔵書には、インド学・仏教学関係の書物が多いことが注目をひきます。インド思想関係の文献は、F・マックス・ミュラーの『六派哲学体系』(*The Six Systems of Indian Philosophy*)をはじめ、『リグ・ヴェーダ』や『ウパニシャッド』、それに『マヌ法典』や『マハーバーラタ』、『バガヴァッド・ギーター』などの英訳も、かれの蔵書の中に含まれています。インド思想関係の文献は、純粋にインド文学関係の文献を除いても、一〇数冊あります。

また、仏教関係の文献としては、T・W・リス・デイヴィズの『仏教、その歴史と文献』(*Buddhism: Its History and Literature*)、同じくリス・デイヴィズの『ジャータカ』の英訳、A・J・エドムンズの『ダンマパダ』の英訳など、洋書四七点、和漢書一点にのぼっています。

インド思想と仏教関係の蔵書数は約七〇冊あり、八雲に大きな影響を与えたハーバード・スペンサーの著作の数を遙かに凌駕していることは、見逃し得ない事実です。しかも、日本仏教に関する書物は、アメリカ時代に購入したと思われる

ものの中には見出されません。

前引のような会話を、八雲と晃が交わしているところに、二人の僧を従えて出てきた寺の大層高齢の住職に対して、八雲は、『東方聖典叢書』(The Sacred Books of the East)の中の經典の翻訳や、ビール、ビュルヌフ、フェエ、リス・デイヴィッツ、ケルンその他の労作について多少の説明を試みたことを記しています。

これは、来日したその日のことですから、かれが日本に来る前に持つことが出来た仏教に関する知識の一部であったことは疑い得ません。しかも先程引用した文の中でも、晃が、床の間から一冊の小さな本を取って、八雲に示したときに、「それはオルコットの『仏教教理問答』の英語版であった」と、いかにもよく知っているものを見たかの如くに書いています。それは当然で、へるん文庫のカタログをみると、八雲は『仏教教理問答』を、ニューオーリンズで、一八八五年六月に入手したようであり、現にへるん文庫の中に入っております。フェエの著作はへるん文庫の中には見当たりませんが、ビール、ビュルヌフ、リス・デイヴィッツの著作は、『仏教教義問答』と同様に、ニューオーリンズ時代に、八雲の蔵書となっております。

四 来日当時の日本のインド学・仏教学

ところで、当時の日本におけるインド学・仏教学の状況を回顧してみますと、東京大学で原坦山が「仏書講義」を開講したのが、一八七九(明治一二)年であり、東京大学文学部が、井上哲次郎、岡倉覚三など八名の第一回卒業生を送り出したのが、翌年の一八八〇年でした。南条文雄(一八四九〜一九二七)が、当時オックスフォード大学で教鞭をとり、目覚ましい活躍をしていたF・マックス・ミュラー(一八二三〜一九〇〇)に、八年間師事して帰国したのは一八八四(明治一七)年、南条文雄が東京大学で梵語学を開講し、近代的インド学・仏教学の端緒を開いたのが翌年の一八八五年のことでした。

この近代的インド学・仏教学の流れは、高楠順次郎(一八六〇〜一九四五)によってさらに押し進められることになりましたが、この高楠順次郎もまた、一八九〇(明治二三)年にイギリスに留学、マックス・ミュラーの許で薫陶を受けて一八九七(明治三〇)年に帰国、一九〇一(明治三四)年に東京大学梵語学教授となりました。奇しくも、ちょうど高楠順次郎がイギリスに向かつて神戸から出帆した一八九〇年三月には逆に、八雲は日本に向けてニューヨークを出帆したのです。

この同じ一八九〇年には、後に八雲を東京大学から解雇す

ることになる井上哲次郎（一八五五—一九四四）が、六年間の留学を終えてドイツから帰国し、東京大学教授となり、わが国で初めてインド哲学史の講義を講じ、夏目漱石などが聴講しました（今西順吉「わが国最初の『印度哲学史』講義（二）」『北大文学部紀要』三九ノ二、平成三年二月、七二—七七頁）。

日本の近代的インド学・仏教学の源流は、南条・高楠の共通の師であるマックス・ミュラーです。そのマックス・ミュラーが監修し、今なお権威を失っていない翻訳叢書『東方聖典叢書』全五〇巻の内、ほぼ半数の二二巻が八雲の蔵書の中に入っています。その二二巻の内、八雲のニューオーリンズ時代に蔵書となった書物の中に、この『東方聖典叢書』の第一巻を飾るマックス・ミュラーのウパニシャッドの英訳が入っているということは偶然の一致かもしれませんが注目してよい事実であります。

日本の近代的インド学・仏教学の開幕の時代に、アメリカから、同じような近代的インド学・仏教学の教養をかなりの密度で蓄積した八雲が日本に上陸したのであります。おそらく八雲は、サンクリットやパーリ語は読めなかったにしても、日本の先端的なインド学・仏教学の研究者がヨーロッパで身に付けて帰国したとほぼ同質の知識をもってやってきたと推定されます。換言すれば、八雲の仏教に関する知識は、日本仏教ではなく、ヨーロッパで発達したインド学の一分野

としてのインド仏教であり、それに関する知識を身に付けてやってきたと思われれます。

五 小泉八雲の仏教観

八雲が、ニューオーリンズ時代に書いたインドと仏教関係の著作の中には、「混乱せる東洋学」(Confused Orientalism)があります。その中で八雲は、仏教学者ではなくて、神智協会の創立者の一人である、アメリカ人のオルコット大佐の『仏教教理問答』を批判していますが、他方エドウィン・アーノルドのブッダの生涯を歌った名著『アジアの光』を高く評価しています。かれはまた、この「混乱せる東洋学」の中で、当時のアメリカで、ヒンドゥー教徒のバイブルともいわれる『バガヴァッド・ギーター』が仏教書として紹介されていることをも批判しています。この事実は、批判することができる程に、仏教に関して、ヒンドゥー教に関して、かなり正確な知識をもっていたことを示唆しております。八雲には、また、「混乱せる東洋学」よりも二年も前に書いた「仏教とは何か」(What Buddhism Is)と言う小論文があります。これは、八雲の来日前の仏教観を見るには恰好の作品であります。その論文の中で、かれは何を述べているのかを見ることにしたいと思います。

(1) 来日前の仏教観—What Buddhism Is—

この論文では、かれはまず当時のアメリカにおける仏教に対する反応について興味深く伝えております。当時、アメリカでは、東洋の諸宗教の歴史やロマンスなどに対する関心が強まるにつれ、神学者の側に、「仏教は合衆国に使徒たちを得て、その目指すところを得るのではないかという、いらぬ懸念を引き起こした」と書いております。何故かと申しますと、彼らには、アーノールドの名著『アジアの光』が「高度に危険な本」であり、また原始仏典の『法句経』が「軽薄な人々向けの精妙な畏である」と受け取られたらしい、というのです。

このような懸念が起こった理由を八雲は分析しています。それによれば、仏教の本当の理論およびその活動が誤った受け取られ方をしていることによるとしております。その例として、つぎの二点を指摘しています。

- 1 仏教を唯物論と同定しようとするさまざまな試みがみられること。
- 2 仏教は、不可知論者がキリスト教の国々に広めようとする精妙な不信仰であるという紹介がいくつもあること。

かれは、このような受け取り方が間違いであることを、① 仏教研究の指導的な権威は大抵敬虔なキリスト教徒であるこ

と、②またそのうちの幾人かは宣教師であること、③そういう人々が世界の人口の三分の一の人々によって信仰されている宗教についてまったく別の意見をもっていること、という三つの理由を挙げて証明しようとしております。

八雲は、一九世紀の学者たちが、底なしの仏教文献の大海から手に入れた素晴らしいもののうち特別に素晴らしいものとして、エドウィン・アーノールドの名著『アジアの光』で広く知られるようになったゴータマ自身の物語を挙げております。さらに、八雲は、仏教の教義の基盤となっている哲学とは—まったく縁のないものであることを指摘しております。八雲は、その証拠として、仏教のどの宗派にも受け入れられている四聖諦を挙げています。

八雲は、この四聖諦から判断して、ブッダが説いたのは、おそらく来るべき輪廻は、この世での行為によるが、完全に有徳な人は、ついには涅槃、すなわち死の直後に起こる完全な断滅 (total extinction) に入るといふ説教を説いたものと理解しております。それゆえに、仏教の開祖は、不可知論者から甚だ遠く、絶対的に積極的に教義をもつ人 (dogmatic) であつたことを示している、と主張し、ゴータマ・ブッダが不可知論者であるという批判を退け、仏教を擁護していただきます。

それと同時に、仏教の中の汎神論的な教義は、ウパニシャッドの哲人たちからの借用であり、輪廻の教えはブッダ以前に説かれたものであることも指摘しております。仏教は、実践的な宗教としては、他の宗教と同じように、不可知論、あるいは自由思想 (free thought) さえも相対立するものであり、敵対する教条に対しては、攻撃的さえもある、といっております。

(2) 来日後の仏教観—Nirvana—

八雲には、前に触れましたように、『仏国土拾遺』(Gleanings in Buddha-Fields) という作品があり、その中に、「ニルヴァーナ」(Nirvana「涅槃」)と題する作品が収められております。この作品は、起草してから三年もかかったといわれる力のこもった論文で、日本に来て、神戸に住んでいたときに纏めた作品であります。来日後のかれの仏教観を知るのに最適な作品であろうと思えます。

さて、先に引用した「東洋の土を踏んだ日」の中の晃と八雲の対話は、一見、何でもないもののようにみえますが、もし八雲の仏教が靈魂の存在を認めないインド仏教に出会ったとすれば、なかなか意味深長で興味深いものとなってまいります。

日本に着いたその日に、日本の仏教徒である晃の口から、

仏教は靈魂を認めないと信じていた八雲が、靈魂があるなどと聞くのは、まことに心外なことであったに違いありません。そのためにわざわざ「私のいう魂の意味はお分かりでしょうかね」と念を押したのであるかと推測されます。

しかもそれで終わらずに、さらに「涅槃に入ってもですか」と畳み掛けて、質問したのはなぜであったのでしょうか。靈魂の問題のみならず、仏教徒が人生の究極の目的とする「涅槃」について、ヒンドゥー教徒も、ジャイナ教徒も、人生の最高目標にしている「解脱」「さとり」について、仏教徒の晃の理解と八雲自身の理解との間に思いがけない大きなギャップを見出したからではなかったでしょうか。

八雲は、作品「涅槃」を、次のような文章で始めております。

涅槃とは、仏教徒にとっては、絶対的な無 (nothingness) と同じもの—つまり、完全な消滅 (annihilation) を意味する、という考えが、いまだに欧米には広く行われている。この考えは間違っている。ただしこの考えが間違っているのは、真理を半分含んでいるにすぎない、という理由によるのである。この半分の真理は、他の半分の真理と一緒にならなければ、興味を引かないし、理解すらも出来ない。そのあとの半分の真理につい

ては、平均的な西洋人の頭では、気づくことすらもないものである。

なるほど、涅槃は断滅 (extinction) を意味する。しかし、この個人存在の断滅ということ、靈魂の死 (soul-death) と解釈するならば、われわれの涅槃についての概念は誤りである。あるいはまた、涅槃を、インドの汎神論によって予言されたように、有限のものが無限のものの中に再び帰入すること (reabsorption) と理解するならば、またもやその觀念は、仏教とは縁のないものとなってしまう。(傍線は筆者による)

それにもかかわらず、もし涅槃は、個人の感覚、感情、思想の断滅 (extinction) を意味する、つまり、意識ある個性の究極の解体 (disintegration) を意味する—換言すれば、「私」という言葉に含まれる一切のものの消滅 (annihilation) を意味する。…と言うならば、仏教の教えの一面を正しく表現していることになるのである (Nirvana, *Gleanings in Buddha-Fields*. Tokyo: Charles E. Tuttle Co., 1981, pp. 211-212)。

この文言を念頭におきながら、先程の晃と八雲との対話を思い起こすとき、八雲が、晃に「私のいう魂の意味はお分かりでしょうね」と念を押し、それに対して、「もちろんです。

小泉八雲の仏教観 (前田)

仏教徒は魂が過去にも未来にも—永久に変わらず存在すると信じています」と答えました。またそれに対して、八雲は、如何にも怪訝そうに、「涅槃に入ってもですか」と尋ねた理由が、はっきりして来るように思われます。

すなわち八雲は、仏教では靈魂を認めないし、仏教の涅槃というのは、当時の西洋の仏教研究者たちの間で広く行われていたと同じように、「完全な消滅である」と理解していたか、あるいはすでにその西洋的理解に何らかの疑問をもっていたかのいずれかであろう、と推定されます。この推定は、八雲の「仏教とは何か」によって確かめられます。

渴愛の抑制は、ブッダによって教えられた善き法 (Good Law) に従うことによって達成される。—その善き法を守ることによって、涅槃、すなわち消滅 (annihilation) が達成される。

われわれは消滅といった。しかしゴータマが、涅槃を、存在のまったき断滅 (utterextinction of being) と見なしたのか、それとも一滴の水が、自分の出てきた大洋に帰るように、靈魂が神の中へ再び帰入すること (re-absorption)、と見なしたかどうかは、今なお議論の沸騰している問題である。われわれは、涅槃が、つねに自我 (Ego) の消滅を意味したかどうか—そうだと今日思われ

ているように一をわれわれは知らないのである。この一点に関してだけでも、一書庫全体を埋め尽くすほどの論が書かれてきた(What Buddhism Is, *Essays in European and Oriental Literature by Lafcadio Hearn*, arranged and edited by A. Mordell. London: William Heinemann Ltd., 1923, p. 280)。

これは、八雲が「四つの聖なる真理」(四聖諦)の中の「道諦」を説明する文脈の中で出てくる記述であります。この記述は、前引の「涅槃」の文章の中の、筆者傍線を施したパラグラフとほぼ一致していると言えらると思えます。

この記述から判断すると、来日する前に、この論文を書いた一八八四年一月二三日の時点では、八雲は、一般に言われているように、涅槃が「私」の消滅であるのか、あるいは前引の「涅槃」にあるように、インドの汎神論によって言されたように、有限のものが無限のものの中に再び帰入すること(reabsorption)と解すべきであるか、決めかねていたと推定されます。その八雲が、晃から従来の自分の仏教理解と矛盾する日本の仏教徒の靈魂観と涅槃観とをきいて、来日早々、予想もしなかった大きな問題にぶつかったのではないでしょうか。

かれの解決すべき問題の一つは、日本の仏教徒の理解する

「涅槃」と西洋的な「涅槃」理解と矛盾しているが、それは何故か、どちらが正しいのか、ということであったと思われる。今ひとつは、日本の仏教徒の靈魂観は、インド仏教の靈魂観と異なるが、それはなぜか、という問題であったと推定されます。

その中の第一の問題の解答が、その作品集『仏国土拾遺』の中の、三年の歳月をかけて書き上げた「涅槃」であったと思われる。かれは「涅槃」で、長年決めかねていた二通りの涅槃の理解を乗り越えて、かれ独自の涅槃観を提示しようとしたのです。また第二の問題の解決のためには、必然的に仏教と習合していた神道の研究に向かわざるを得なかったのだと推測されます。

八雲は、松江に落ち着いて間もなく、在米の親友エリザベス・ビスランド女史(後のウェートモア夫人)に宛てた、来日の感動と歓喜にあふれた手紙の末尾に「私は今熱心に仏教研究に没頭しているのはいうまでもありません」と書き添えています。このような仏教研究の成果が、かれの晩年の一四年間の日本研究の卒業論文ともいわれる『日本—一つの試論』の中の、仏教が、本来本質的には相容れない神道と如何に習合していったかを論じている「仏教の伝来」と、「涅槃」を前提にしている「高度の仏教」という二つの作品ではなかつたかと、推測されます。

八雲は、「涅槃」のなかで、西洋人が涅槃を正しく理解できない理由は、西洋人の「我」(Self)についての観念にあると、ずばりと指摘しております。

西欧人にとって、「私」とは感情・観念・記憶・意志を意味するものである。…ところが仏教徒は、その反対に、われわれが「私」といつているものは、あれはことごとく偽りだと言うのである。仏教徒は、「自我」(Ego)というものを、人間の肉体的・精神的経験によって作られた感覚・衝動・観念の―つまり、いずれは消滅すべき人間の肉体に關係があり、人間の肉体とともに消滅すべき運命をもっている一切のもの、ほんの仮りに結ばれた集合体にすぎないものだとして定義している。西欧人の理性から見て、実在のうちで最も信じ、抛りどころとすべきものと思われているものを、仏教徒の理性は、これを幻影の最も大なるもの、一切の悲嘆・罪業の根源であると言っているのである (Nirvana, *op. cit.*, pp. 212-213)。

このような理解から、八雲は、涅槃とは、西欧人が靈魂と呼んでいる袋―じつは、その袋は、幻影 (illusion) という厚地の布で織ってある袋なのだが―の消滅であって、そのなかに絶対の実在である仏性が現れ出ることであると主張して

います。したがって涅槃は消滅ではありませんが、それは絶対的な無に帰することではなく、自我という靈魂が消滅して、永遠にして犯すべからざる絶対の仏性が現れることであります。あらゆる生類のなかに、この仏性が、すなわち無量の智慧が、眠っているのですが、最後には目覚めるといいます。八雲は、仏教の「經文の真の意義を理解する前に、まずもって、西欧の神と靈魂、物質と精神に関する一般通念は、仏教哲学には存在しないということを理解しておく必要がある」(Nirvana, *op. cit.*, p. 218) ことを強調しています。

六 むすび

そろそろ時間が参りましたので、最後に、八雲は仏教の「無我説」をどのように考えていたのか、についてお話しして、締め括りたいと思います。

八雲は、その「涅槃」の中で、仏教の代表的な教えである「無我説」を取り上げて、仏教の無我説が、道徳的に価値の高い重要な教義であるにもかかわらず、西洋の思想家たちは、正しい評価を与えていないことを指摘しております。

西洋に根強く見られる、仏教の無我説と相反する諸々の信仰を取り上げて、それらが如何に多くの人類の不幸を引き起こしているかを、次のように批判しております。

（仏教の無我説と）正反対な信仰——つまり、常住なものがあるといふ迷妄、言い換えれば、性格、身分、階級、信条の差別は、ある不変の法則によって定められているといふ迷妄、——不変・不死の有情の靈魂は、神の氣紛れによつて、永遠の幸福か、永遠の煉獄へ行くように運命づけられているといふ迷妄——これらの迷妄から、如何に多くの人類の不幸が起つてゐることであろうか。

疑うまでもなく、神といふものは、怨みをもつたら最後、どこどこまでも怨みつづけるといふ觀念、——靈魂は、一定不変の状態に宿命づけられている永遠・不変の实体であるといふ觀念、——罪は償ふことができず、罰は決して終わらないといふ觀念——こういう觀念は、社会がかつての未開な發展段階にあつた時代には価値がない訳ではなかつた。しかしこれからますます進歩する未来の人類進化の中では、そんな觀念は、お払い箱になつてしまふにきまつてゐる（*Nirvana, op. cit., p. 228*）。

と、断言しております。そして八雲はさらに続けてつぎのように申します。

そんな西洋的な觀念を一日も早く衰滅させるような明るい結果を招くために、西洋思想が東洋思想と接触するこ

とが望まれる。そんな西洋的な觀念を發達させた感情さえも、われわれのなかに尾を引いている間は、本当の意味の寛容の精神なぞ生まれるわけがないし、眞の人類同胞の觀念も、世界愛の目覚めも、起りつこはないのである（*Nirvana, op. cit., p. 228*）。

このように八雲は、永遠不滅の自我といふものを認めず、性格・階級・民族の差別というものを認めない仏教のもつ今日的・未來的意義を強調しております。

近年、安易に「自我の確立」などといつて、西洋的な自我を、猿真似のように強調する人々がおりますが、西洋的な自我の行き着くところは、今日の世界のあちこちで起きているような様々な紛争であり、究極的には人類の滅亡を招くことになります。八雲が、すでに、九〇年も前に、仏教の無我説の今日的・未來的意義を見出し、西洋思想が東洋思想と接触することを望んでいたことは、驚嘆すべきことであります。世界の狀況が、今日のように多くの民族が緊密に接し合い、共生していく必要があるような時代になつて参りますとますます仏教の無我説の考え方が重要になつてくるのではないかと思ひます。